

# 大逆転初優勝

## 得意のプレーオフで栄冠

通算3オーバー、147

69歳の山浦正継（志摩シーサイド）



勝負を決めた渾身の一打。ピンまで残り220ヤード。プレーオフ2ホール目の10番ロング（485ヤード）。目の前には大きな木。山浦は3Wでスライスをかけた。本人が「会心の当たり」と振り返った第2打は葉っぱをかすめてグリーン奥に乗った。対する前年度チャンピオンの前田は第1打を右に曲げ、3オンは果たすが、ピン左5m。バーディーパットは外れ、2オン2パットのバーディーを奪った山浦に凱歌が上がった。プレーオフ1ホール目の18番ロング（505ヤード）はともにバーディー。山浦は2ホール連続でバーディーを奪ったのだから、敗れた前田も諦めがつくかもしれない。

「プレーオフは5回目くらいかな。負けたのは1度だけ。ただ、プレーオフは何回やって

もいい気がせん。負けたら悔しいし、勝っても相手に悪いし。プロとアマは違う」と喜びも控えめだ。プレーオフで思い出されるのは2018年の九州シニア（門司）。この時は3ホール目で決着がついた。山浦はボギーを叩いたが、相手がダブルボギーで自滅した形となった。

6打差をひっくり返しての大逆転V。最終組から10組前の第1組スタートの山浦の優勝に、ベテラン大会関係者が「記憶にない」というほどだった。ただ、山浦自身は「優勝するんじゃないか」との手応えを感じて大会に臨んだ。昨年12月から2月までの3カ月間、毎夜速足での1時間のウォーキングで下半身を強化した結果、今年はホームコースの志摩シーサイドでエージシュートとなる「68」を2度。自信を持って大会入りしたのだが、ゴルフがかみ合わずに初日は「76」のスコアで23タイと出遅れた。

でも、諦めない。最終日は6mの風が吹き、ピンの位置も難しくなった。「スコアは伸びない。アンダーで回ればチャンスはある」とベテランの読み通りにコトは進んだ。山浦は3バーディー、2ボギーの71をマーク。最終日のベストスコアでもあり、唯一のアンダーパーとなった。

69歳での初出場、初優勝。2度の九州シニアのタイトルを持つ男に、また1つ勲章が加わった。ひそかに狙うのが九州ミッドアマチュアの優勝。「69歳でも戦える」。山浦には「衰え」という言葉は無縁だ。



○…プレーオフに敗れ、前田弘（チェリー宇土）の連覇はならなかった。「土壇場で基礎体力の大事さを知らされました。（練習ラウンドを含め）3日連続で疲れしました」。プレーオフでは2ホール連続でティーショットを大きく右に曲げた。最初の1ホール目は2mのバーディーパットを決めて山浦に食らいついたが、2ホール目で涙を飲んだ。疲労がドライバーショットに影響を及ぼした。しかし、負けたとは言え、前田の表情は淡々としていた。「全国大会では、ただ出るだけではなく、上位争いをしたい。うまい人と一緒に回れるのが楽しみ」と初出場となる日本ミッドアマでの活躍を誓った。

【写真はプレーオフで優勝した山浦④と敗れた前田⑤】



クラブハウス



打撃練習場